

日本美術学史序説(4)

田中日佐夫

〈注目すべき「刀剣書」の先駆性〉

一年分ほど休載してしまつた。いよいよ序章から第一章へと書きつがねばならないときになつて筆が——というころとは思考が堂々めぐりを始めて——止つてしまつた原因は二つある。次のようなことである。

『古今著聞集』に登場した八絵難房¹などが示すように、美術作品のすぐれた観察者の存在が、重要な問題として明らかになつた。ところがそのとき、私の脳裏に浮かんだのは刀剣の観察者、ひいては論者の存在であつた。¹

刀剣というものは、その本体あるいは鞘や柄の飾りなどをふくめて、現在では「工芸」に属している。さすれば、刀剣についても本論テーマにふくめてよいはずである。

広く知られているように、承久の乱を起こし、歌人としても有名であつた後鳥羽院は、『増鏡』に「劍などを御覧じ知事さへ、いかで習はせ給へるにか、道の者にもやまざりて、かしこくおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせたまふ²」と記されている。こういう八観察者²へ目利き³が現われていたことは十分に考慮すべきだと思つたのである。そして私には、そういうことと関連して別に考えることもあつたのである。

私はもともと八茶の美術Vにおいて、茶道具の上にいわゆる「景色」を見るところについてある疑問を持ち続けていた。「景色」とは特に陶磁器の鑑賞の見所になるものをいい、「釉なだれ・照り・焦げ・火間・ビードロ・釉など、釉薬のかかり具合や熔け具合または火加減によって器面に不測の変化が生じることがあるが、茶人間ではこれらを景色として賞する。器物の正面を定める場合、この景色によることが多い」という。私自身はお茶にかかわりなく、むしろこういう美意識とは無縁なところに身を置こうとしてきた。しかし、日本人の美意識の中にこのようなものが存在し、それがこの上なく鋭敏で精緻な観察眼と、自由な感情移入可能な心性を必要とするものであることは理解できるのである。

ただ不思議なことは、茶の宗匠たちなら当然かもしれないが、戦塵の中に明け暮れていた武將たちの中に、この観察眼と心性をもっていたにちがいないと考えられる者たちがいたことは、これはまたどうしたことであろうかという事であったのである。戦場を疾駆していた武將たちが、どうやって美術品をみる精緻な目と、自由なる心性を獲得し、それを育て続けることができたのであろうか。

ここで私が思いついたのが、彼ら武將たちが絶えず観察し続けていた「刀剣」の存在であった。なかならずその鍛えや刃文のことであった。刀剣の品質は武將自身の生命を賭るものである。よりよい刀剣を持つことは、即、自分の命を守り、敵に勝つことを意味した。と同時に、その武將の、武將としてのステイタスを決定するものであった。

そしてその刀剣の品質を見分けるには、鋭い観察眼で「地鉄（鍛え）」「刃文」「切先」「中心と銘」などを見極めねばならぬ。鋼を折り返し鍛練することによっていろいろな模様が刀身に現われる。その形体によって「板目肌」「柰目肌」「柃目肌」「綾杉肌」などに分れる。また、焼き入れによって地と刃の境界に現われるいろいろな文様を「刃文」といい、「直刃」「小乱れ」「丁字」「互の目」「灣れ」「皆焼」「濤瀾」などに大別される。そういういろいろな非具象の文様（火によって現われる図形）を観察し、さらに刀剣全体の、あるいは部分の具体的形態をはっきりと把握しなければ鑑定（目利き）はできない。武將などひとかどの武士たちは、自分の差し料などについてこの観察を絶えず行っていたと想像できる。

この、武將たちが刀剣の上に行っていた観察は、その性

質上、茶器の観察ときわめて類似するものであったのでは

なからうか。またそれが、どちらが先に行われたかといえ
ば、それは刀剣の方だったと思う。すなわち武将たちが茶
器の鑑賞に入る素地は刀剣の観察によってできていたと私
は考えるのである。

この考えは今のところそうまちがったものではないと私
は思っている。が、それはともかくとして、少なくともこ
ういう考え方もできるほどの存在感を、刀剣は社会におけ
る在り方に示していたとは言える。ただ私自身は刀剣の鑑
定について正式に勉強したことはもちろん、鑑賞を重ねて
きたわけでもない。しかしそれでも本論において、刀剣に
関する文献を抜きにして先に進むことはできないと思うの
である。そのため諸書からの引用、まとめに過ぎないなが
ら、以下『刀剣書』について述べてみたい。

現存する刀剣そのものを主題とする最も古い文献は『銘
尽(観智院本)』といわれる。またそれより少し時代の遅れ
る『往昔抄』などであろう。いずれも室町時代の文献であ
る。

○『銘尽(観智院本)』一冊

応永卅年十二月廿一日書写の奥書がある

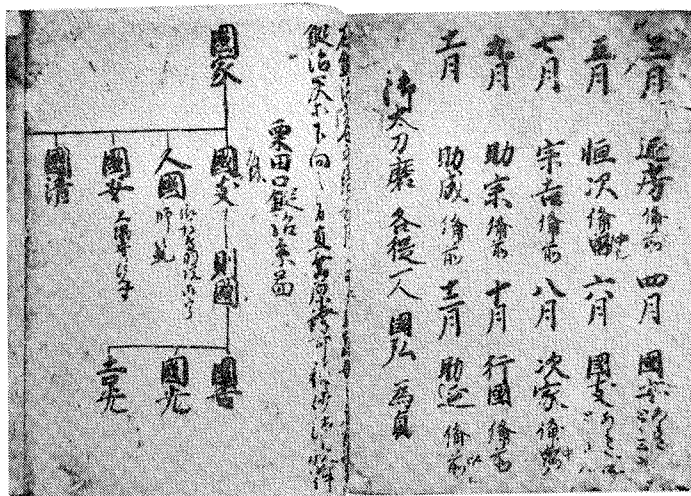
縦27・5 横21・3 室町時代

京都東寺の塔頭・観智院に伝来した、応永三十年(一四
二三)に書写された刀剣書である。これについては、かつ
て辻本直男氏が「中世に於ける刀剣書」の研究(一)——観智
院本銘尽について——⁽⁴⁾でくわしく論じられている。これに
よると『銘尽(観智院本)』は「既存の南洞院の蔵本より書
写した」もので、「正和五年(二三一六)までは……年也」
という記入も見られる。「従つて其本に書かれている内容
は其時(引用者注・応永三十年)より更に以前のものを対象
としているのであり又其体裁も首尾一貫した著述ではな
い。しかしその内容は次のようなもので、意外なほどに豊
富な記録性や資料性を備えていると私は思う。

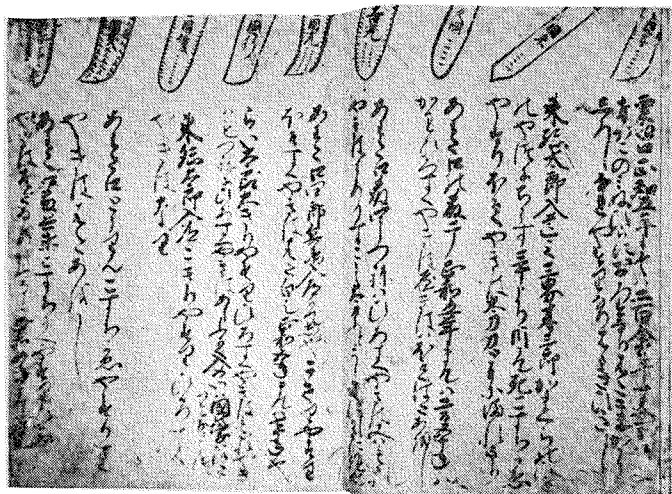
巻首を欠いており、「開巻第一行には正宗(五郎入道)、貞
宗(彦四郎・左衛門尉に任ず)とあり、次に大宮国盛(以下略)
等十余人の名が見え、其丁の裏には備前備中雑鍛冶交名と
題して兩國の刀工三十六人の名を列べ、次の丁には太刀刀
作善悪日之事を記すが是は十二支の日を善悪に二分したも
の」という。これに続いて、

一、古今諸国鍛冶之銘 「備前の政真を首にして、備

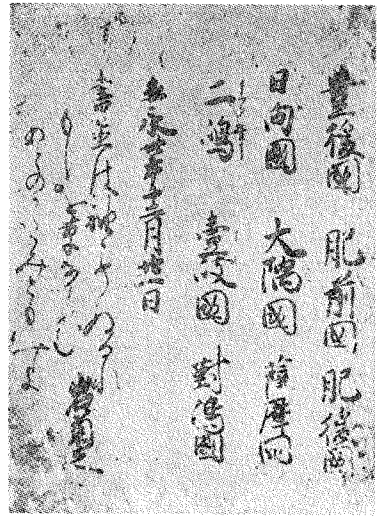
前・備中・粟田口・来・大和・美濃・豊後等諸国の



『銘尺 (観智院本)』: ①



『同』: ②



『同』：③

四十二刀工について主として地肌・やきば・なかごのやすり等の作柄と、国、系統、時代などを平仮名書きの国文体を似て簡単に説明する。(中略)又其上欄には中心の稚拙な見取図を掲げ、それには銘・ヤスリ・目釘穴を画いている(傍点引用者)』

一、銘尽

- (1) 神代鍛冶
- (2) 日本国鍛冶銘
- (3) 神代より当代までの上手之事

この銘尽是本書の主体をなすもので、三四〇名の刀工を列記して、その作風や所在地を脚注する。主要

刀工の系図なども挿入されているが地域について奥州などにも言及していることが注目される。

一、時代別の部

- (1) 大宝年中
- (2) 一条院御宇
- (3) 後鳥羽院御宇

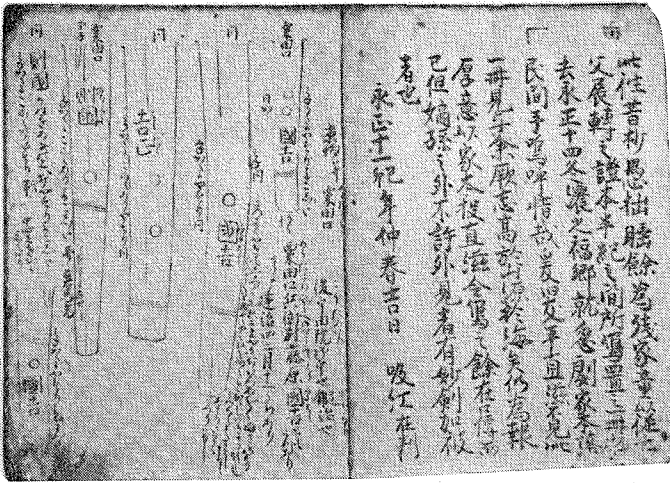
この三つの時代を刀剣の盛期ととらえ(そういう「時代認識」を明示していることも注目に値しよう)、「番鍛治以外の者に就ては一々住国、其の工の手になる名剣と其の持主、或いは伝説、稀には中心の事を加えて之を典雅な和文体を以て記している」

一、国別の部

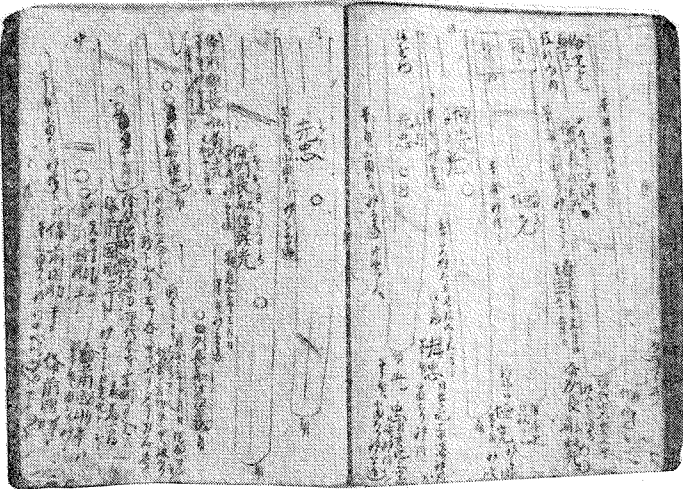
- (1) 系図
- (2) 銘寄

前述したように、この『銘尽(観智院本)』は、整然と統一した形でまとまっていはいないとはいふものの、その対象とするものを、定まった史観によって長い時代にわたり、しかもわが国全地域を視野におさめつつ集録し、具体的に論じようとする態度が一貫して見て取れることは注目に値しよう。

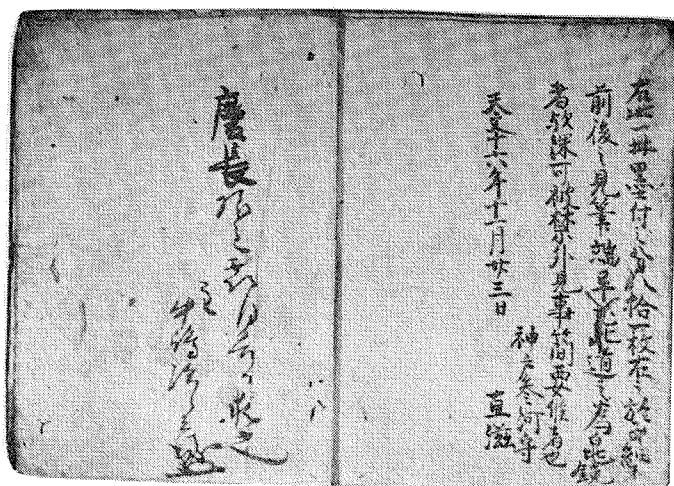
つぎに『銘尽(観智院本)』について古い八刀剣書Vとされる『往昔抄』について。これについては一九七六年に東



『往昔抄』：①



『同』：②



『同』：③

京国立博物館で開催された「日本の武器武具展」のカタログ所収の解説をそのまま引用する（ただし数字などは算用数字から漢字に改める）。

○『往昔抄』 一冊

室町時代（十六世紀）

刀のナカゴの図を集録したもので、総数八〇四図あり、これを京物並粟田口、東国物、南方、中国並西国、備中国物、北国物、備前物等の七つの集団に大別し、その順序にしたがって載せている。原本は美濃国の斎藤利匡が永正年間に図したものであるから、室町中期頃までの刀が収められている。江戸の初期に出版された『古今銘尺』の心形像押形の大部分は本書からとっている。刀剣のナカゴ図集としては最も古く、そしてよくまとまった善本である。

ここに示した挿図写真も同カタログから借用したものである。このようなハ刀剣書Vに記されている内容が、前にも記したように刀剣そのものに則してきわめて具体的であり、鑑定の目安となるところを客観的に押さえ、系統的であり、広い視野から国別の記述なども網羅的で行きとどいていることには驚かされるのである。そういう意味では、

歌論、能楽論などとともに際立った一種の△作品論▽といえよう。

わが国における本格的な△画論▽や△絵画史論▽がまだ現れない時代に、このような論書が美術の一ジャンルたる刀剣のうえに現われていたことにも愕然たるものがあるのである。このことはわが国の刀剣という一種の美術品の性格を考え、またこの刀剣にかかわる後藤家の工芸手腕、さらに刀剣目利きなどを本職とした本阿弥家から特異な綜合芸術家としての姿を際立たせた本阿弥光悦が出現したこと、などを考えるときにも重要であると思う。

以上述べてきたように、私は日本美術史学史の中に、意外なほど早い時期に、しかも構造的には完備した形で存在したものととして、△刀剣書▽を置かねばならないことを知ったのである。

そして私は、これら刀剣書を見ているうちに、はたと気がついたことがあった。それはのちに述べる、一般的に日本美術史の最初の書物とされる『本朝画史』あるいは『丹青若木集』などが、画家の著作であるにもかかわらず、△刀剣書▽にあるナカゴの図のような意味での挿図を一切挿入していないことである。画家は相当自由に「縮図」が描け

たはずである。にもかかわらず、なぜ画家の美術史的著述に挿図が入っていないのか。私はここでまた思考の堂々めぐりを余儀なくされたのである。

そういえば、かのヴァザーリの『美術家列伝』にも作品縮図の挿図は入っていない。どちらも△画人伝▽だから「作品縮図」は必要としなかったのかも知れない。しかし、それらの本が純粋な、たとえていえば村松梢風の『本朝画人伝』のごとき△画人伝▽ではない。第一、画家が書いたのになぜ作品縮図を必要とするような作品論をふくんだ△画（人）論▽にならなかったのだろうか。私はヴァザーリの『美術家列伝』などは作品論の比重も相当なものとして理解しているのだが、それでも挿図はない。

どうも私たちは美術を論じる際の「作品縮図」⇨「作品複写の挿図」についても、根本的な考察を加えねばならないようである。というのは、現在は写真などの光学機械の発達によって、あまりにその複写というものに頼り過ぎていのではないか。これでよいのか、という反省をこめて考える必要があるように、私は思っているからである。だが、ここではそういうことを考えついたということだけを述べるにとどめて、先に進もうと思う。

〈「財産目録」と使用マニユアルの綜合〉

さきに私は「寺院などの財産目録」について述べ、その例として『仏日庵公物目録』をあげた(連載(3))。しかし、そういえば寺院などの財産目録は、なにも鎌倉時代に始まったことではない。たとえば古代の『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』とか『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』など、いわゆる「寺院縁起并流記資材帳」における「流記資材帳」の部分などそのもともよい例である。「流記」とは「後代にまで流す記録」という意味で、「年々作られる資材帳の中、特に後世まで留めて永例となすものを流記資材帳」という。資材帳について『寧楽遺文』下巻所収の「解説」には次のように述べられている。

資材帳の作成は、寺の三綱のみでなく、国師(分注略)と国司及び衆僧と檀越とが立ち会ひで、一一実物を検知して明瞭に記帳する。官大寺では、国師の代りに僧綱がこれに当る。その記載事項は寺の縁起から、寺の敷地建物・仏像・經典・仏具・道具・雑具・稻穀米銭の財物・寺領・住僧・奴婢の數に至るまで細大漏

さず、あらゆるものを尽し、道具財物はその使用目的を決定して、仏物(仏分ともある。殿堂、衣服牀帳等の仏受用の物、仏衣幡蓋等仏菩薩に属し、或は仏菩薩の供養に用ひられる)・法物(法分とも。箱函・机・櫃等、經典保持・供養に用ひられる物)・僧物(住僧が生活するために用ふる道具)・通物(通分ともいふ。仏・法・僧三者を通じて共通に使用するもの)に大別して記してある。諸道具は、一々その寸法まで記入し、その精密さは、戸籍・計帳・正税帳等に相通ずるものがある。

「献物帳」などとも類似の性格を持つものと考えられるが、官による寺院の「流記資材帳」の作成も、平安時代に入つて以降は毎年ということはなくなつた。しかし、その伝統は寺院内部においてながく受け伝えられていたと考えられる。

そして唐物輸入の盛んな中で、前回述べた『仏日庵公物目録』などが作成されたのである。このような行為は当然権力者にも受け継がれる。特に、「天山」印、「道有」印などという鑑蔵印を使い分けていたと見られる足利義満、また卓抜な鑑定眼を持っていたと『蔭涼軒日録』などに伝えられる足利義政の周辺などにあつては、その所持する絵画

類の目録が完成されていたのも当然であつたであらう。そのよい例が『御物御画目録』である。

御物御画目録

白石観音	脇 韋駄天 竜	牧 溪和尙	長井布袋思恭	脇 瀑 馬 驕 人 形 馬 遠
□ 観音	脇 禅 会	牧 溪	渡江達磨	脇 政 黄 牛 郁 山 主 無 準 和 尚 画 併 賛
観音	脇 豊 干 泉 大 道	牧 溪	出 山 积 迦 無 準 和 尚 併 賛	脇 五 祖、六 祖 弘 光 禅 師 賛 思 恭
出 山 积 迦	脇 山 水	梁 椿	簡 翁 賛 半 身 布 袋	脇 船 子、漁 父 虚 堂 賛
蝦 蟆 和 尚	脇 寒 山 十 徳	牧 溪	観 音	脇 鷄
积 迦 曹 弗 輿	脇 鳥 花	馬 遠	出 山 积 迦	脇 人 形
□ □	脇 人 形	竜 眠	半 身 達 磨	脇 猿
□ 音 月 壺	脇 鷺	牧 溪	源 室 兼 賛 達 磨	脇 雀
無 準 賛 半 身 達 磨 門 無 関	脇 寒 山 十 徳 虚 堂 賛	牧 溪	老 子	脇 鴿 雀
観 音 馬 遠	脇 鳥	牧 溪	偃 溪 賛 布 袋 梁 椿	脇 人 形
維 摩 西 金 居 士	脇 鷄	李 安 忠	布 袋	脇 八 々 鳥
草 衣 文 珠 竜 眼	脇 犬 猫	徽 宗 皇 帝	虚 谷 賛 老 子 梁 椿	脇 雉 子 鷄 骨
三 教	脇 山 水	君 沢	観 音 梁 椿	脇 鳥
好 醋 顔 輝	脇 猿	牧 溪	普 賢 梁 椿	脇 猿
小 福 祿 寿 馬 驕	脇 鷄	李 安 忠	虚 堂 賛 出 山 积 迦 柯 山	脇 寒 山 十 徳 宣 后 橋 賛
小 観 音 啼 子	脇 山 水	梁 椿	防 季 潭 賛 布 袋 馬 遠	脇 鳥
五 幡 観 音	脇 三 笑 四 眼 猿	牧 溪	普 賢	脇 花 鳥
			虚 堂 賛 達 磨	脇 朝 陽 对 月
				牧 溪
				舜 拳
				率 翁
				牧 溪
				牧 溪
				自 賛 牧 溪

〔紙〕

布袋梁楷

五幅觀音柯山

〈大〉

觀音

呂洞賓

寿星

布袋梁楷

觀音月壺

維摩思恭

卮算寺觀音

五幅徧祿寿

〈四幅〉

山水

猿

猿

琴碁書画

人形

山水

草虫

万里高山

脇鳥

脇人形

脇猿鶴

脇三笑四眠

脇竜虎

脇竜虎

脇竜虎

脇猿

脇雉水鳥

脇楼閣

徽完皇帝

牧溪

牧溪

梁楷

王暉

竜眠

李迪

牧溪

牧溪

馬遠

牧溪

牧溪

牧溪

牧溪

牧溪

馬麟

感陽官

山水

禅会

〈紙横〉

八景

小八景

八景

八景

〈二幅〉

鶴

禅会

浪岸

寒林

猿

〈独幅〉

山水

积迦三尊

布袋

寒山十德

月山

曜郷

牧溪

牧溪

芳汝

夏圭

玉礪

玉礪

牧溪

月壺

玉礪

摩結

牧溪

牧溪

牧溪

夏圭

月壺

思恭

竜眠

山水
宮女
人形
琵琶
人形

舜拳
舜拳

人形

延暉

右目錄者從鹿園院殿已來御物御繪御注文也

能阿弥撰之

東山殿同朋相阿弥之真蹟也

筆跡関主古筆氏了仲

〈小二幅〉

鳩鷄
猿飼

徽宗皇帝
梁楷

最後に記されている「右目錄者從鹿園院殿已來御物御繪注文也 能阿弥撰之」は、三代將軍足利義滿からその所藏品を受け継いだ四代義持、五代義量、六代義教、七代義勝、八代義政に至る約四十年間のうちに彼らが藏した絵の中から能阿弥が撰んだということであり、まずは信ずべき記載であらう。

鳴
狗

徽宗皇帝
李迪

山水

夏圭

魚藍子、靈照女

馬麟

花鳥

徐熙

花

趙昌

花鳥

趙昌

鷹

李安忠

〈四幅〉

百鳥

梁楷

禅会

馬遠

菓子鳥

月山

山水

馬遠

この『御物御画目錄』についてはかつて谷信一氏がくわしく論じられている。それによると、冒頭には「絹」とあったはずといい、「絹」の十八幅と次の「紙」の二十幅とは「三幅対の中庸大の作品」をまとめたものである。次に「大」とあるのは「三幅対での大画」であり、「四幅」は中画の「四幅対」、「紙横」はおなじく中画の「八幅対」、「二幅」はおなじく中画の「二幅対」となり、ついで「独幅」に続けて「小二幅」は小画の「二幅対」であり、最後の「四幅」は小画の「四幅対」である、というのである。そ

計	9	8	7	6	5	4	3	2	1	種類 数
9	四 幅	小 二 幅	独 幅	二 幅	紙 横	四 幅	大	紙	(絹力)	
90	5	10	8	6	4	11	8	20	18	点数
280 (279) (画)	20	20	8	12 (文字1)	32	44	26	62	56	幅数

の収録点数は、これも谷氏作成のものであるが、別表のよ
うなものである。⁽⁸⁾

この『御物御画目録』には後に述べるような作品に対す
る評価(上・中などという)を付することはない。しかし、
もともとは別個に受け入れたものもあつたであろう、しか
も作者も時代も異なるものもある作品を、対の作品として
組み合わせるべく決定するには、卓越した批評眼が必要で
あつたと言わねばなるまい。そういう意味では一点一点の
評価を行っている次に述べる『君台観左右帳記』より、よ
り複雑な奥深いものを私は感じるのである。

『御物御画目録』の撰者とされる能阿弥。彼は応永四年
(二三九七)に生まれた。もと朝倉家の武士、本姓は中尾と
伝えられ、名は真能、別称能阿、号は春鷗斎。足利義政に
仕えて同朋衆となつた。水墨画をよくしたが、同時に連歌
にもすぐれて、同時代の代表的な連歌師でもあつた。文明
三年(一四七二)に没したが、子の芸阿弥(一四三一〜八五、
孫の相阿弥(？〜一五二五)とともに三阿弥と称される。

この能阿弥と、さらには孫の相阿弥の著書とされるもの
に『君台観左右帳記』がある。この『君台観左右帳記』に
は相当数の系統を異にする写本が存在するが、ほとんどの

研究者はそれを「文明八年三月十二日 能阿弥」の奥書がある〈群書類従本〉と、「永正八年十月十六日 真相」の奥書がある〈東北大学本〉とを典型と考えて、二つに分けている。この二本ともに、「中国画人名」を列記した前篇と、「座敷飾」を文と略図で解説した後篇というべき二つの内容で構成されている。次に〈群書類従本〉と〈東北大学本〉の冒頭部分を示すと次のようである。

上 君台観左右帳記 絵之筆者上中下

- 三國興 曹弗興。仏像。
- 唐 王摩詰。山水人形色取。字王維。
- 宋 李竜眠。羅漢人形馬形色取。墨繪有。李公麟字伯時。
- 同 郭灝。山水墨絵。
- 宋 趙昌。花鳥葉折枝色取。字昌之。
- 同 易元吉。花鳥猿猴色取。字曆之。
- 宋 趙大年。花鳥山水人形色取。令穰。字大年。
- 唐 吳道子。観音色取。
- 宋 徽宗皇帝。山水人物花鳥色取。字體。
- 同 李成。山水人形墨絵。
- 南唐 徐灝。花鳥魚虫獸色取。
- 宋 成宗道。人物色取。

- 同 陳所翁。龍鳥人形枯木竹墨絵色取。陳容字公儲号之。
- 同 玉潤。山水草花竹。僧若芬。自讃字仲石号之美蓉峯上。
- 同 馬公頭。山水人物花鳥色取。
- 同 李安忠。山水花鳥人形馬形走獸鷹色取。
- 同 閻次平。山水人物牛色取。
- 同 梁楷。山水人物鬼神佛祖色取。墨絵モアリ。梁風子。
- 同 毛益。花鳥獸色取。字晞古。
- 同 陸青。山水墨絵。
- 同 馬麟。山水人物花鳥鬼神。馬遠弟子。
- 同 僧牧溪。山水人物龍虎花鳥。蕪法常号之。
- 同 李唐。山水人物牛墨絵。馬遠弟子。
- 同 李迪。山水人物牛花鳥色取。
- 同 蘇漢臣。道尺人物色取。
- 同 馬遠。山水人物花鳥色取。
- 同 夏珪。山水人形墨絵色取。
- 同 王輝。山水人物花鳥色取。馬遠弟子。
- 同 樓観。山水人物花鳥色取。馬遠弟子。
- 同 蘇頌祖。山水人物。

(以下省略)

君台観左右帳記

上

吳

曹弗興 吳興人、仏像・於竜長

上

晋

顧愷之、字長康 晋陵無錫人、丹青筆法、造其妙

上

陳

顧野王、字希馮 吳郡人、草虫

上

唐

吳道玄、字道子 陽翟人、観音

上

王維、字摩詰 開元初、人物・山水

上々

宋

徽宗 山水・人形・花鳥・魚虫、宣和殿と申

上々々

李公麟、字伯時、号竜眠居士 舒城人、馬長・

上々々

仏像・羅漢・山水・人物

李成、字咸熙 山水

上

郭熙 河陽温県人、善山水・寒林

上

(以下省略)

右の一部分を見てもわかるように、〈群書類従本〉は「絵之筆者」を「上」(五十名)、「中」(三十八名)、「下」(六十八名)の三つのグループに分けて列記し、その画家が活躍した時代などは人名の注として記しているに過ぎない。それに対して〈東北大学本〉では、大きく「上」「中」「下」に分け、そのそれぞれの中で王朝(時代)順に列記し、さらにその画家名の上部に「上」(四十九名)のグループでは四名に「上々々」、十二名に「上々」、十三名に「上」、九名に「上中」を(一名不明)、「中」(四十一名)のグループでは十九名に「中上」を、「下」(八十七名)のグループでは三十一名に「下上」と記入している。

このように画家名を列記して記述する「画人録」という形は、この時代には舶載されていたと思われる至正二十五年(一三六五)の自序がある元代の画家夏文彦の『図繪宝鑑』などに倣ったものであろう。たとえば〈東北大学本〉の李唐に注記されている「善画山水・人物」とか「尤工画牛」などという言葉は『図繪宝鑑』の同人に関する記述の中に見ることが出来る。恐らくは『図繪宝鑑』などの中国書を参考にしながらごくごく簡単に省略した形で注記したのであろう。ただし『図繪宝鑑』などには上・中・下の分

類はない。

ちなみに、この上・中・下の評価を与える仕方は藤原公任(九六六〜一〇四一)の歌論『九品和歌』⁽¹¹⁾によったものであるという。ただし『九品和歌』にあつては、上品上、上品中、上品下、中品上、中品中、中品下、下品上、下品中、下品下に分け、たとえば

上品上

これは言葉たへにして。あまりに心さへある也。

ほのく／＼とあかしの浦のあさ霧にしまかくれ行船をしそ思

春たつといふ計りにやみよしの山も霞てけさはみゆるむ

などと記しているのではあるが、これに比較すると、『君台観左右帳記』の記述はきわめて具体的性格に欠けるものがあるといわねばなるまい。

また享徳三年(一四五四)にまとめられた一種の名数辞典『撮壤集』⁽¹²⁾の「絵部」「画師名」にも相当数の画師名が列記されている。

〈群書類従本〉の『君台観左右帳記』の奥書にある文明八年(一四七六)は能阿弥の死後五年のこともあり、同書

の偽書説もあるのだが、こういう画人名列記の書物が、この時代の将軍家御蔵番的職掌の人たちの中で書き継がれていたのであることは否定しなくてもよいであろう。ただ、それは後篇の「座敷飾」などが示しているように、画家なしはその作品を対象とする美術(史)論というより、やはり一種の実用書であり、権威を持つ者がその権威をもつて定めた評価を明らかにする、そしてそれらの作品をいかに飾るかを説いたものという性格のものであったと言いうるのである。そういう『君台観左右帳記』そのものの性格付けを十分に考えておかねばならぬと私は思うのである。

〈茶人の観察記——拝見する者の記録〉

戦国時代から活躍していた茶人に津田宗達(一五〇四〜一五六)、宗及(？〜一五九二)、宗凡という三代の者がいる。いずれも堺の豪商天王寺屋の当主として有名な人で、宗達は「三十六人衆」の一人として堺の自治のため貢献、そのあとを継いだ宗及は茶の湯によって織田信長、豊臣秀吉に仕えて、千利休・今井宗久とともに三宗匠の一人とされた。当然のことながら交際範囲も広く、茶道具の名器を所持す

るとともに、他人の所持する名画や名器を拝見する機会に恵まれていた。

この三代の茶湯日記(それぞれ他会記・自会記に分れている)を合わせて『天王寺屋会記』と称している。近年、永島福太郎氏の編によってその影印本が発行されたが、そのうち「宗及茶湯日記 他会記」の永禄九年十二月から同十三年四月までの分に、絵画作品など二十二図ほど(一旦描いて消した三図をふくめて)の略図が描かれている。そのうちの主なるものをあげると

- 永禄十年二月十七日(「月絵」)
- 同二月二十六日(「市絵」)
- 同三月一日(「漁夫之絵」)
- 同十二月十八日(「菓子之絵」)
- 同十二月五日(二十五)日(「半身布衣(袋)絵」二回描いてゐる)
- 永禄十一年正月十五日(「虚堂の墨跡略図」)
- 同二月九日(「万里江山」の絵)
- 同十二月十日(「すいせん花之絵」)
- 同十二月十日(「つくものかまなすび」の肩の部分の略図)

○永禄十二年三月二十三日(「硯の略図」)

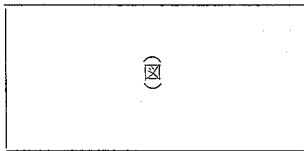
○永禄十三年四月四日(「かうじロ」の絵)

このうち有名な玉瀾筆「洞庭秋月図」「山市晴嵐図」を拝見したときと、「つくものかまなすび」を拝見したときの記載を永島氏の注をふくめてそのまま例として次にあげる。

同日晩に
道叱江

宗閑 雲 叟 及 四人

月絵拝見申候、月、絵のまんなかより少絵の右方江より申候、上の紙はづれより一寸ばかり下ニ有、屋たいかつらぶぎのやうなるもの也、帯之上下のほどらい少中ほどより下江さがり候はん欵、帯の左方江より申候也、屋たいの左方ニ木村有、木村の中江雲かゝりたるやうに見へ申候、やたいのはしら三本見へ申候、かけづくりのやうにかき申候、屋たいと



(図)

月とのあい、とを山有、山のうへばかり見へ申候、屋たいの下江(洲)すぎきのやうなるものかき出候也、屋たいのうへ江も山おほ半かゝりたるやうに見え申候、但、此山はうへ江見え不申候、かすみにまぎれたるやうにかき申候、さん七言之さん也、おくのかきとめに、少さげて、どうていの種月とかき申候也、いん、臈而種月とかきたる下の方ニちいさきいん一ツ有、それよりさがりて大なるいん、これあざやかなるいん也、すこしかたむきて有、これハかミのはづれ也、ひうし(表)、上下とくさ色のもよぎ也、もんハミづにれうを折た(縁カ)る也、かな地也、中るり色なり、もんたからづくしのからくさ也、かな地にてハなく候、一文字ふうたいますれうのたん色也、

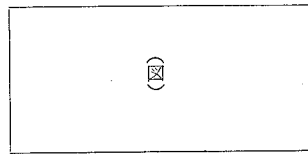
①ますれう
升電。蟠電。

②市絵 山市
晴嵐絵。玉
罫筆。

同二月廿六日 道叱二而、

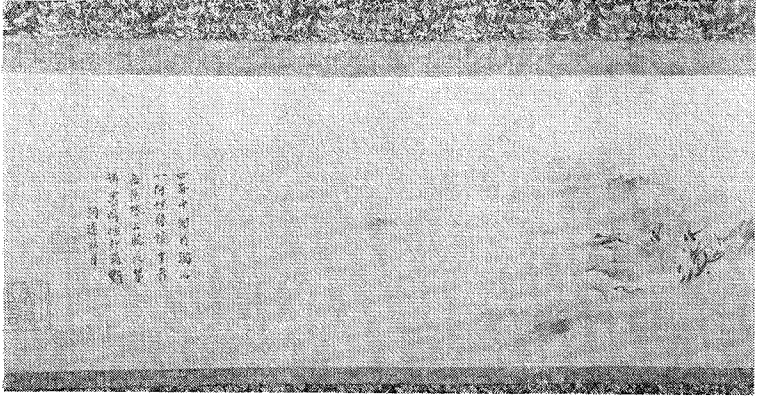
人数 宗閑 宗漣 了雲 及
はかた紹安之絵也、市絵拝見申候、右絵也、
やたい九有か、人三人、一方より二人、一方より一人、以上三人有かと覚申候、木むらお

③有所 在る
所。在所。
村のこと。

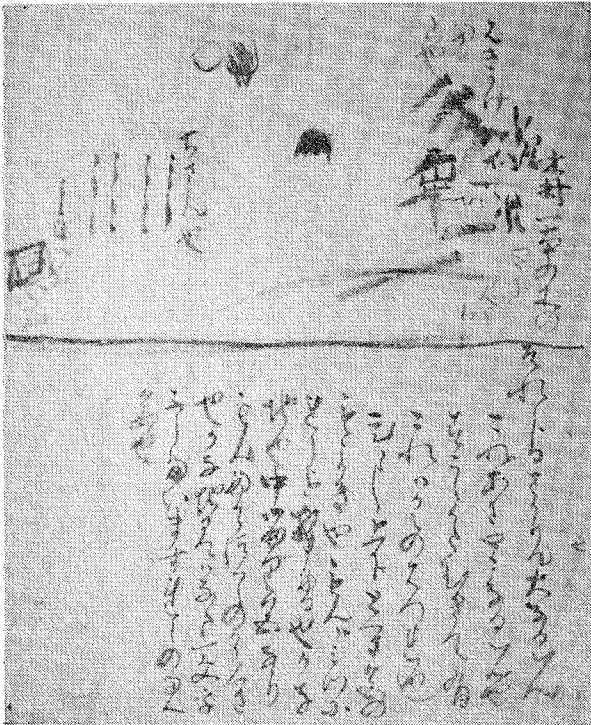


ほく御座候也、山うへに三ツ有かと覚候、有所のやうなるところを、帯のまん中に書申候也、しも道叱の月絵などのしよりも中江より申候也、いんもゆがミ不申候、玉罫か、

いんの大なるばかり候也、人二人ハはしの方より在所江のほり申候、一人ハ浦の方よりのほり申候かと覚候、はし有、中時分にてつき申たるハしにて候也、人二人行道をかきわけたる也、惣別、此絵一段すみぐるなる絵也、にぎやかなるか、屋たいのまはりいそがハし(縁)きやうにかき申候也、昏新候也、げだいに(外)はきやうにかき申候也、昏新候也、げだいに山市晴嵐、かやうにかき申候、同げだいの下江わき江より申候て、玉罫筆、かやうにかき申候也、しには山市晴嵐、かやうにかき申候也、此らんの字は、たけなわといふ字也、
ひうぐ、道叱などのと同時也、



玉潤筆「洞庭秋月図」



拝見記



王潤筆「山市晴嵐図」



拝見記

※以下、正月

十日朝会に
至るまで、

底本に句点

○がつけら
れている。

参考のた

め、ここに

掲出した。

なお字アキ

は校訂者が

施したもの
である。

永禄十一年辰十二月十日之戌(戌)之刻
北才木町木屋宗右衛門方ニ而

つくものかまなすび 始而拝見申候、

※此壺なり(平)ひらめに見え申候。ころ大がた也

土あまりこまやかにハなく候。薬色あかぐる

く候。右此つぼおもひのほかにくすミたるつ

ぼ也。おもてのなだれハなだれなどのやうに

は見え申さず候。くすりにしミたるやうニ見

え申候也。盆つきにて薬とまり候。なだれの

左右ニくすり(盆)らんじたるところあり。石間ハ

面のつぼの右方ニあり。わきよりハすこしう

しろのかたニあり。色ぐすりハ少かすはげた

るやうニ見え申候。くすりうすきやうなり

土しゆした(糸)かにいだしたる也。但なだれの

右方ニあり。そこハは(いと)けめまろくあり

一段土あつ見え申候。口づくりうけたるや

うニあり。ひねりかへしあり。うちへハくす

り少かゝりたるなり。石間とおぼしきところ
はすこしうへ江。たかくありあがり申候。乍去

めにハたち不申候。かたより。石間。ゆび一

つ。おき候てほどした。有之。おびハすこ

しさがり申候。かたすこしつき申候。かたも

中(高)だかなるやうに見え申候。おびハ一すぢあ

り。つぼ。はげたかにハ見え申さず候。口な

どハふたをつかまつり候へば。大なるやうニ

見え申候へ共。ひねりかへしがひらりと御入

候条。口のうちハせばく御座候。つぼの年は

四十ばかりなるものを見るやうニ候。くすミ

たるとは見え申候へ共。又花やかなる所もあ

り。ひねりかへしの下方。少出入あるか。盆

つきハすき申候。中時分よりの下にてはり申

候。つぼの中時分より下之方ニ而こしはりニ

見え申候。

此御つぼの上にても。土などハおかしくもな

く候歟。石間なども。ねがハくバよくもなし

此石間。土などニ御座候ハ。さのミめにハ
たち申まじく候へ共。薬の中ニ依有之。相
当つかまつらぬやうニ見え申候。乍去。此石

①山な殿 但馬・因幡の守護大名。応仁の乱の西軍の大将山名宗全が有名。

②あのみづく づくは蓋のつまみ。

間ハひまともむかしより申伝候。又(或)有説にハ。山な殿ぐそくのそでにつけられてぎすがつきたるなどとも申伝候。菟角さやうには見え申さず候。つぼの(生)生まれつきにて御座候。惣別 此つぼ。すこしもいやしきやうにはなし。あまりニくくありすぎたるやうに見え申候。拙子文琳などよりハ。茶入まじ乍去。ちがいと申共。すこしの事にて御座候。ハんと存候。ふた(蓋)。ざうげ(象牙)。但きりめなり。あのみづくなり。玉ぶちあり。ふた一段あつくあり。殊うちへのふくミなどハ。一段ふかく有之。うらはく(箱)なり。袋白地キンラン。但金地なり。うらあさぎなり。おつがりあさぎ也。

此かたよりハ
ちがひ々々
あるべく候



なかなか精緻な観察であることが理解されよう。なかでも「洞庭秋月図」や「山市晴嵐図」では、どのように見えるかということ執拗なまでに記し、画面に描かれている

ものの位置関係を明記し、そのうえで「一段すみぐるなる絵也」とか「にぎやかなる」「いそがしきやうに」などという言葉をも有効に使っているようである。

この観察記録には、自分が拝見したときの客観的事実と印象などを、まず自分のために、そして人にも伝えうる形で残そうという意志が読み取れると、私は思う。一種の〈縮図〉にして残そうという意志の根底には、他人のものを自分が拝見するという行為があったことが知られるのである。そしてこれは次回(次章)でふれる〈探幽縮図〉、あるいは〈探幽筆「草木花写生図巻」〉などが制作されるときの意欲などにも通じるものがあると指摘できると思うのである。

注

(1) 以下刀剣に関する論旨の一部は、かつて「日本人の美意識を決定した一つについて」という短文として『文学』(岩波書店・一九八九年十二月号)「文学のひろば」に発表した。

(2) 『増鏡』のうち「第二新島守」(岩波日本古典文学大系87所収)による。

(3) 『原色茶道大辞典』(淡交社)による。

- (4) 辻本直男「中世における刀剣書の研究」(一)——観智院本銘尽について——(『刀剣美術』二十二号所収)
- (5) 『特別展「日本の武器武具」』(東京国立博物館 昭和五十一年発行) 所載の「解説」一六八による。
- (6) 竹内理三編『寧楽遺文』下巻(東京堂出版 昭和四〇年第二刷発行) 所収の「解説」中「寺院縁起并流記資材帳」による。(ただし引用の場合新字体に変えた)
- (7) この『御物御画目録』は吉村貞司著『足利義満』(昭和四十四年 三彩社発行)の巻末に所収されているものによった。
- (8) 谷信一「御物御画目録」(谷信一著『室町時代美術史論』(東京堂 昭和十八年再版発行) 所収)
- (9) 『群書類従』巻第三百六十一(第十九輯 遊戯部)に収められている。
- (10) 赤井達郎・村井康彦 校注「君台観左右帳記」(岩波書店・日本思想大系『古代中世芸術論』所収)による。この「君台観左右帳記」については谷信一「君台観左右帳記解題」(淡交社『茶道古典全集』第二巻所収)をはじめとして、林屋辰三郎「古代中世の芸術思想」、赤井達郎・村井康彦「君台観左右帳記」(以上『古代中世芸術論』所収)による。
- (11) 『群書類従』巻第二百九十三(第十六輯 和歌部)に収められている。
- (12) 『統群書類従』巻第八百八十九(第三十輯下 雑部)に収められている。
- (13) 永島福太郎編『天王寺屋会記』全七巻(一九八九年 淡交社)。ここでは「二 他会記下」「六 解説編上」から引用させていただいた。